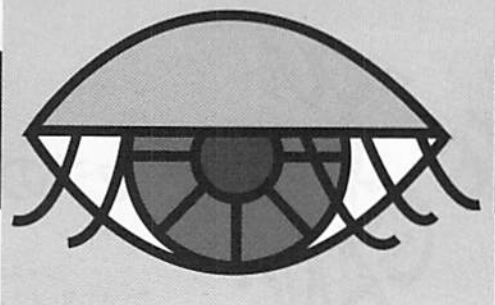


# FAME Report



京都ノゾキ見トピックス

**京都デビューの、次なる流行はこれだ！**  
**「いづみみちこ きものコレクション」**  
 “和と洋のジャンルを越えた  
 きもの革命”で、もっと気軽に、  
 お着物召しませ。



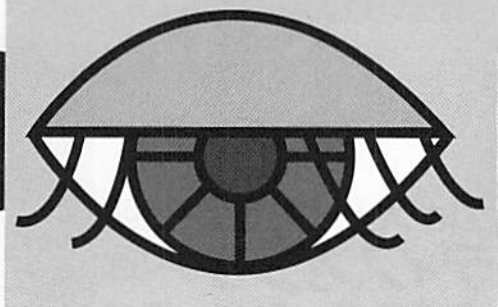
ライター／切通里香

着物といえは、大袈裟な柄と高価なお値段で、つい遠い存在になりがち。そんな固定概念を覆す作品が、気鋭のデザイナー・いづみみちこから発表された。4月15日、京都ブランドンホテルで行われた彼女のきものデビュー・コレクションを見てみると、着物というのは、あくまで洋服のヴァリエーションの一部だと思えてくる。例えばジャポネスクというカタカナが似合うエスニック・モード。いづみみちこにとって、着物は、和でも洋でも関係のないものかも知れない。要は楽しく創り、楽しく着ること。創り手であると同時に、女性として消費者の立場で発想できる人だな、と思う。もともと体に布を巻き付けてベルトでしめることが「服」の原点だとすれば、まさに着物がそうであり、シルエットがシンプルな分、色や素材の効果がダイレクトに表れてくるはず。今回いづみみちこことアップした(株)竹下利は、白生地屋として創業二〇〇年という京都の織りの老舗。このコレクションでは、素材自体にデザイン・イメージを織り込んだというだけあって、染めだけでは表れない生地風合いが光っていた。茶、緑、赤紫、黄土の深く沈んだ古代色の基調の中で、織りのうねりが流水のように走り、金銀のラメが雲母のように輝いている。ダンスミュージックにのせてリズムカルに歩くモデルたちの現代的な顔にマッチした、洋服のニュー・バージョンとして、着物が生まれ変わるつとじているのを実感した。

更には、今まで不透明だった着物の価格を全国統一にし、ブティックなど洋服の販売ルートにのせようとの目論みもある。新しいファッション・スタイルをデザインと流通の両方から提案しようという爽やかな野心が、今後、沈滞モードのアパレル界の起爆剤となってくれることを祈る。

和服の持つ閉鎖性をとっばらって、もっと自由に発想すれば、着物はもっと身近になるだろう。  
 商品問合せ(株)竹下利 075・221・7451

# FAME Report



京都ノゾキ見トピックス

ライター/あさかよしこ カメラマン/ハリ-中西



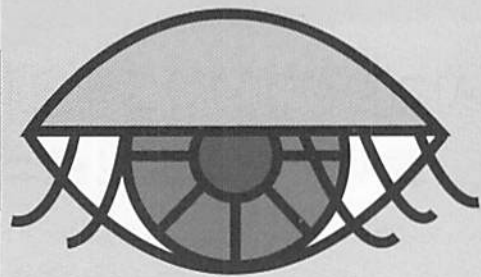
## これは、 春の夜の夢のような出来事。

その男は、宇崎竜童&井上堯之のライブが始まって30分ほどたったときに、都雅都雅のフロントの前に姿を現したのである。黒のトックリのセーターに皮ジャン、入り口のノレンのせいで、こちらから顔は見えない。手にしているのは、一本の白いバラらしい。竜童氏のファンなんだろうな、このオジサン。かわいいいじゃないの。「混んでますねえ」とボソリ。混んでるよ、盛り上がってるよ、くるのが遅いよオジサン！ステージでは、竜童氏がマイクを握ってシブイ語りをきかせている。「いま僕は京都で映画撮ってるんですよ。高倉健さんとこいっしょに。今日僕はライブがありますからって健さんに言ったら、「行こうかな」だって。んなこと言ったって、健さんが都雅都雅なんか、来るわけねえやなあ。」そりゃそうだと、客もデヘヘッと笑う。「……」と思っただけど、??? なんんか

来ちゃったみたい！」もしや……と思っただけのオジサンの方を向くと、揺れるノレン越しに見えた横顔が、モウまきれもなく、真正正銘の生身の高倉健サマ。もう大バニツクになっちゃった。ステージが上がって、メチャメチャに照れまくって、ニタラニタラしている健さんに「奈江ちゃん、元氣イッ!?」と客席から声が飛ぶ。JRAのCMで共演した裕木奈江のことだ。「ハア、元氣みたいですよ。」律儀に答える健さん、なんだかワイイのである。ライブの取材で来ていたこちらとしては、一旦しまいかけたカメラをアタフタとセットして、もう無節操に撮りまくる。なんたって、この時健さん、竜童氏や井上氏にそそのかされて、あの「網走番外地」をはじめて人前で、ナマで歌ってしまったのだから。それもフルコーラス。夜の京都では、こんな事も起きるのである。



# FAME Report



京都ノミキ見トピックス

## 水のせせらぎと名画が織りなす、 芸術の庭。

永遠の輝きを持つ陶版画の数々を展示した、  
北山の新名所「陶版画の庭」へ。



京都市左京区下鴨半木町 ☎075・724・2188  
開園時間・午前9時～午後5時（入園は午後4時30分まで）  
休園日・1/1～4、12/28～31  
入園料・一般1000円、小中学生500円  
※満60才以上の方、身体障害者手帳又は療育手帳を所持する方は無料。但し満60才以上の方は要証明書。

3月24日、北山に新しい名所ともいえる「庭」が誕生した。府立植物園と府立資料館の間、そこからのぞく巨大にそそり立つコンクリートの壁。ここが京都府立「陶版画の庭」である。まず陶版画とは何か。これは原画を撮影したポジフィルムから写真製版し、転写した陶板を焼成して鮮やかな色合いを出したものだ。変色も腐食もせず長期の保存が可能なのもあって、焼物と名画を複合した新しい芸術として現在注目を浴びている分野である。「美術館でなく「庭」と称する理由は、そのエンタランスをくぐると見えてくる。地上一階地下二階の回廊式になっている石畳を進んでゆくとまず目に入る「睡蓮・朝（モネ作）」。壁に掛けられているのではなく、手すりから覗いた下を流れる水底に置かれているという、凝った造りだ。緩やかなスロープになった通路を進んでゆき、壁面に飾られた「鳥獣人物戯画（鳥羽僧正作）」を眺め地下へ。展示物の中でも圧倒的な迫力を持つ「最後の審判（ミケランジェロ作）」が見えてくる。ほぼ原寸大というこの作品は高さ14mもあり、訪れる者から感嘆の声が上がる。屋外にあることから陽の照り具合で絵の雰囲気も変化するという、まさしく名画の庭らしい演出だ。この他にも「ラ・グラン・ジャット島の日曜日（ルノアール作）」「テラスにて（ルノアール作）」など計8点の作品が、全てほぼ原寸大か縦横約2倍の拡大で展示されている。庭園内を流れるように流れる水音で、通りの喧騒は耳に届かない。水の流れと共に、ゆっくりと過ぎてゆく時間の流れまで目に見えるような、贅沢な都会の庭である。

ライター／木村紀子